

iTTLで初めての交換留学

2021年9月8日、期待と不安を胸いっぱい抱えながら留学先のイギリスに足を踏み入れました。本稿では、国際情報学部（以下、iTTL）の1期生として、さらにはiTTLからの交換留学生第1号として、紆余曲折を辿りながら留学に至った私の経験をシェアさせていただきます。

私は母が日本人、父がイギリス人の東京生まれ東京育ち。両国に自分のルーツがあることを誇りに思いながら生きてきました。そのため、常々日本からの視点だけではなく、イギリスの視点も持つて勉強してみたいという思いが強くなりました。iTTLに入学してからは、今学んでいることを日本とは異なる文化の視点からも学びたい、留学したいという気持ちが強くなっていき、留学を経て、語学力をさらに高めたいという思いもありましたが、英語はあ

諦めずに掴んだ留学

国際情報学部国際情報学科4年
都立駒場高等学校出身

アラン 江玲奈

くまでもコミュニケーションツール。実際の知識やスキルが大切だと考えた私は、iTTLで特に興味を持って学んでいた「メディア」の分野で、自分のルーツの一つであるイギリスに留学することを決めました。もともとは、2年次後期から留学する計画でしたが、コロナ禍で延期となり、周りが就活を始めていた3年次後期、ついに単身で海を渡りました。

「メディア」を専門に学ぶ日々

イギリス・レスター大学では、メディアの歴史や現代におけるメディアとの向き合い方などを学びました。授業の構成は「120分の講義」と「学生同士で討論する60分の演習」。演習では必ず学生の意見が求められるため、自分自身も予習をしっかりとしてから授業に臨む習慣ができました。授業で取り扱われるテーマは、ヨーロッパでの事例が中心でありつつ、世界各国のニュースや企業の事例も多く取り上げて考

察していた点が印象的でした。とりわけ、メディアが与える印象操作については非常に興味深かったです。湾岸戦争時に流出した油にまみれた水鳥の写真が実は事実ではなかったり、インフルエンサーがよく知らずに宣伝しているダイエツトアプリが実はなんの効用もないものであったり。マスメディアだけではなく個人もインターネット上で自由に発信できるようになった現代だからこそ起こりうるメディアの問題点は、iTTLで学んできた情報と法律の問題とも共通しています。

国際的な対応が急務であるこれらの問題を、いち日本人としてイギリスで学び、ディスカッションできた経験は非常に貴重でした。レスター大学は、イギリスだけではなくさまざまな国の学生が学び合う環境があり、それぞれ異なる文化や価値観を持つた学生の意見を聞くことができたため、これまでまったくなかった発想に触れ吸収することもできました。



また、教室を離れた日常生活の中で、学生のほとんどがテレビを見ず、SNSで情報を仕入れていることに気付き、フィルターバブル（泡に包まれたかのように、自身の価値観に近い情報しか見えなくなる）が当たり前になってきているのではないかと、という危機感を覚えました。これは実際に現地でも生活したからこそ得られた気付きであり、すぐにiTTLのゼミの教授にその衝撃を共有したことを覚えています。



自身のルーツを肌で感じる貴重な1年でした

課外活動も成長の場

学修面以外では、大学のバレーボールチームに所属し、毎週のように練習と試合に打ち込みました。バレーは、イギリスではあまりメジャーなスポーツではないため、小学生のころから競技経験のあった私は、トップチームでプレーをさせてもらうことができました。初めはブランクや英語力の不安が勝り積極的になれませんでした。バレーがチームスポーツであることも相まって、徐々にメンバーと打ち解けていくことができました。私たちのチームは全員国籍が違うこともあり、さまざまな衝突がありました。留学を終えてからも連絡を取り合う友人をたくさん作ることができました。どんなに背景や宗教が異なっても、相手の話を聞き尊重することの重要性を学ぶことができ、留学は学修以外の場でも私を成長させてくれたと感じています。



試合中のコマ。4番が筆者

チャレンジを諦めない

専門の分野だけではなくさまざまなことを学んだ密度の濃い1年を振り返って思うことは、あの時コロナ禍を理由に留学を諦めなくて良かったということです。自分の本当にやりたいと思うことに対して希望を持ち続け、一歩踏み出したことにより得た経験は私の人生の財産となりました。先輩のいないiTLで初めて留学という道を進んだ学生として、少しでも後輩の背中を押せるように、そしてこの経験を無駄にせず両国で学んだことを今後の人生で活かせるよう、残り少ない大学生活を有意義に過ごしていきたいと思っています。



留学先で出会った親友と



イギリスといえばフィッシュ&チップス